

京都大学	博士（人間・環境学）	氏名	下 村 恭 太
論文題目	ヴィラモヴィアン語の代名詞体系における言語変化		
(論文内容の要旨)			
本論文は、ポーランド南部のヴィラモヴィツェ地方 (Wilamowice) で話されているドイツ語系変種ヴィラモヴィアン語 (Wymysiöeryś, 独語Wilmesurisch, 英語Wymysorys, ポーランド語Język wilamowski) を対象に、代名詞体系に関する言語変化を考察するものであり、標準ドイツ語とは異なる使用条件を示す3つの現象を扱う。すなわち、(1) 女性を指示対象とする際の自然性と文法性の不一致現象、(2) 非人称構文にまで拡張した再帰構文、(3) 1・2人称にまで拡大した再帰代名詞zih (独語sich) である。 これらの用法の背景には、ポーランド語およびポーランド語諸方言との接触による影響があると考えられる。ポーランド語およびその諸方言はヴィラモヴィアン語の音韻・形態・統語体系に影響を与えており、上記のいずれの現象に関してもヴィラモヴィアン語と同様の使用傾向が観察されるためである。しかしながら、これらの現象は言語接触だけに起因するわけではなく、文法化のような言語内的な要因も考えられる。それゆえ、本論文では言語変化における外的要因である接触と、内的要因である文法化の相互作用に着目して代名詞体系を記述することを主眼としている。 本稿は全体が8章で構成され、第1章では、ヴィラモヴィアン語の概要、ヴィラモヴィツェの歴史およびポーランド語との接触状況を紹介した上で、調査で使用する書記・音声資料に関し説明を行っている。 続く第2章では、本調査で扱う3つの現象の前提として、ヴィラモヴィアン語における人称代名詞・再帰代名詞についての先行研究の文法記述を概観し、第3章では、言語変化の理論的枠組みを整理し、特に言語接触と文法化について説明している。 第4章では、これら3つの現象に関する先行研究を整理する。まず、不一致現象について、標準ドイツ語では語彙的意味や形態的要因が主たる要因とされる一方で、本論文は、ドイツ南西部のドイツ語諸方言において、指示対象の年齢や指示対象と話者との関係性といった社会語用論的要因が関与することを指摘している。さらに、ヴィラモヴィアン語の先行研究に見られる指示対象との関係性に基づく不一致現象も踏まえ、本論文はドイツ語諸方言と類似した傾向が部分的に認められることを指摘する。 次に、再帰構文の拡張について、標準ドイツ語とポーランド語の用法を概観し、両者の相違点をまず整理する。一方、ヴィラモヴィアン語については、再帰用法に関する詳細な記述はこれまでなされていないことが指摘される。また、再帰代名詞zihの人称拡大については、標準ドイツ語では3人称主語でのみsichが使用されるのに対し、ヴィラモヴィアン語では3人称だけではなく全人称で使われることを明らかにしている。さらに、その生起要因としては、隣接するチェコ語やポーランド語の影響や、古期ドイツ語で使用されていた語源の異なる形態が音的弱化を経て再帰代名詞と合流したことなど、複数の要因を指摘している。 第5章では、女性名および人名における文法性の不一致現象に関し、ヴィラモヴィアン語での調査結果とその傾向を報告している。定冠詞および人称代名詞の用法を対象とした分析の結果、文法性の選択は主として指示対象との年齢差に基づいており、女性名詞では年上の指示対象に関しては女性形が選ばれやすく、年下では中性形が優勢である			

ことが明らかになった。また、人名では年齢差に関わらず中性形が多く用いられることが確認された。これらの結果から、本章は、文法性の不一致現象は社会語用論的要因に加え、ポーランド語諸方言との接触など、複合的な要因によって生じていると考察している。

第6章では、再帰用法の拡張と人称の拡大使用について考察がなされ、その調査結果が示されている。再帰用法についてはドイツ語でも確認される照応的再帰構文、形式的再帰構文、相互構文、反使役構文に加え、ヴィラモヴィアン語では非人称構文も確認された。他方、人称の拡大使用に関しては、複数形での`zih`の使用が顕著と言え、単数形ではほとんど生起しないことが明らかとなった。

第7章では、分析対象とした現象がすべて、外的要因である言語接触と内的要因である文法化・談話・認知的要因が複合的に作用した結果である可能性を考察している。外的要因は変化の方向性を示し、変化を促進する役割を担う一方で、内的要因は変化の体系的定着、意味的連続性、談話的妥当性を示す。これらの作用を統合的に考えることで、ヴィラモヴィアン語における言語変化を包括的に説明できるのではないかと主張する。

第8章では、本論文の総括を行った上で、代名詞以外のカテゴリーに関しても同様の現象が確認できるか、また、コーパス作成などのデータ整備を今後の研究課題とすることが述べられている。さらに、ヴィラモヴィアン語の変化の様相を分析することが、言語変化一般のメカニズムを理解する上での貢献となる可能性についても言及している。

(論文審査の結果の要旨)

本論文で取り上げられているヴィラモヴィアン語はドイツ語の1変種であり、自然性と文法性の不一致現象、再帰代名詞*zih*の使用拡大に関する一連の変化現象はドイツ語とは異なる特徴を示すものであるにもかかわらず、詳細な記述・分析が十分に行われていなかった。特にドイツ語からの逸脱については、ポーランド語との接触による影響が主因として指摘されるにとどまり、言語内的な要因を含めた考察はほとんどされてこなかった。こうした背景を踏まえ、本論文は、書記資料に加え、これまでなされていない音声資料を活用することにより、さらにはインフォーマント調査から収集したデータを厳密に用いて学術的な分析を行い、これら諸現象が実際にどのような分布を示すかを明確に示している。また、いかなる使用条件のもとでその現象が生起するのかを現地でのフィールドワーク調査から得られた統計資料に基づき細部に至るまで具体的に調べ上げている。これらの調査・分析はヴィラモヴィアン語の記述文法に貴重なデータをもたらす優れた取り組みであると言える。

文法性の不一致現象について、本論文は語彙的意味や語用論的文脈が文法性の再解釈に与える影響を検討している。ヴィラモヴィアン語では、人間を指す名詞には原則として自然性に基づく文法性が付与されるが、*tohter*「娘」、*śwaster*「姉妹」のような女性を指す名詞において、代名詞照応の際に中性が用いられる用例が見られる。この変化は話者と指示対象の間の親密性・感情的距離感といった語用論的要因が文法性の選択に影響を及ぼしている可能性を示している。さらに本論文は、もともと文法性が中性であり自然性との不一致が生じている*mākja*「少女」からの類推によって、不一致現象が*tohter*、*śwaster*に拡大したと解釈できることを示しており、言語変化の主因とされてきた隣接するポーランド語方言との接触はこの再解釈を誘発させる契機となったと考えられものの、不一致現象の拡張と定着には言語内部の要因が関与しているのではないかという独自の論点を提起している。

申請者は他のさまざまな言語接触にも通じており、本論文の再帰代名詞*zih*の人称的・意味的拡張に関しても、ポーランド語との言語接触のみからでは説明できない言語内的変化の連続性を提唱する。再帰構文の意味論的スキーマに照らし合わせ、動作主と被動作主が部分的に一致する用法や、他動詞構文への二次的拡張は、意味的関連性に基づく連続的な変化であると本論文は位置づける。さらに、1・2人称への*zih*の使用は、談話レベルのダイクシスが関与し、複数人称における指示対象の文脈依存性や曖昧性が、3人称との機能的類似性を生み出した結果、使用範囲の拡大が促進されたとする独創的な解釈を提示している。

以上のような分析から、これらの変化は、言語外的要因としての言語接触が変化の

契機となるものの、言語内的要因がその拡張と体系的定着を主導するという複層的な相互作用のもとで進行していることが判明する。本論文は接触の影響を前提としながらも、これだけでは説明しきれない言語変化の内在的側面にも着目している点で非常に意義深い。

同時に、方言学全般への目配せも十分にできており、本論文は危機言語であるヴィラモヴィアン語の文法記述として、これまで十分に記述されてこなかった文法性の再解釈や再帰構文の拡張といった現象を詳細に分析した点でも意義があると認められる。現在もなお変化の途上にある言語の文法を俯瞰的に記述することは容易ではないが、こうした言語の動態的側面を把握する姿勢は進行中の言語変化の理解において不可欠な視点である。本論文で提示した分析方法は、少数言語研究のみならず、言語接触や言語変化の研究分野における事例研究としても有益な基盤を提供するものと考えられる。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、令和7年11月25日、研究内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 令和 年 月 日以降